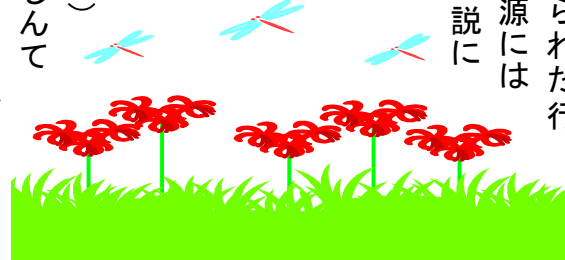




彼岸会（ひがんえ）の起源

彼岸会はインドや中国になく、日本ではじめられた行事です。その起源には諸説があり、一説には、聖徳太子の時代（五七四〜六二一）に

さかのぼるといわれますが、最初の記録としては大同元年（八〇六）崇神天皇（すじんてんのう）のために国分寺の僧に春秋二季の七日間にわたり、金剛般若波羅蜜多經（こんごうはらみたまきょう）を転読させたのが彼岸行事のはじめといわれます。彼岸会は平安時代の半ばには恒例の行事になっていったようです。また、彼岸を春分、秋分の日（の前後七日）にさだめたのは、次の事が起源



とされます。中国、唐代の僧で中国浄土教を大成した善導大師の「観無量寿經（かんむりょうじゆきょう）」の中に「念仏をして西方浄土への往生を願うには、春（三月）・秋（九月）の陽が真西に没する時期がもっともふさわしい。なぜなら極楽浄土は陽が没する真西の方向にあり、その方位を念じて往生を願うことは浄土を観想するにふさわしいからだ」という意味のことが説かれています

つまり浄土教の説によれば、彼岸は西方浄土であり、浄土を念ずる日である、ということになるでしょう。春分の日は「自然をたたえ、生き物をいつくしむ日」であり、秋分の日は「祖先をうやまい、なくなつた人々をしのぶ日」とされています。さらには自身自身の生活をかえりみて人間らしい毎日を送れるようにいましめる期間としても良いと思います。お彼岸中には次の六つを守りましょう。

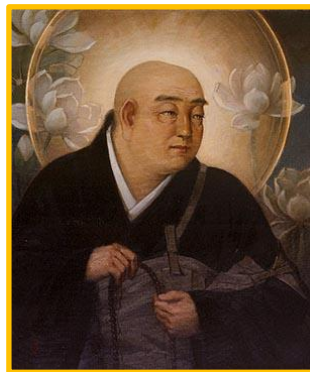


幸福への道

- 六波羅蜜（ろくはらみつ）
- 一、奉仕の心を忘れない
- 二、規律や人との約束を守る
- 三、花のような柔和な心をもつ
- 四、今日の務めに精を出し、励む
- 五、平常心を忘れず、あわてない
- 六、物事を正しく判断する知恵をもつ

※お彼岸中に読むお経は「観無量寿經」の一説を読みます

◆法然上人八百周年大遠忌を迎えるにあたり住職の感想



明年平成二十三年は浄土宗を開かれた法然上人の八百回忌の年にあたります。年回忌は五十回忌を過ぎると五十年に一度の大忌な区切りとなる法要が行われます。人生八十年として、人によると二回このご縁に会うことが出来ます。昭和三十六年がこの前の七百五十回忌が修められました。

た。その頃は皆さんいかがおすごしでしたか？
この次の八百五十年遠忌は五十年後ですから多くの方が仏さまになられているでしょう。いまこの当世代の東京の浄土宗寺院住職および寺院の関係者により浄土宗で一番大切な「南無阿弥陀仏」のお名号（みようごう）を書いて五十年後の年に残すという計画があり、法問寺住職がその事業の企画実行を任せております。お寺のお子様にも書いてもらうつもりなので五十年後にこの名号が開示され、何か色々な事を伝えてくれると思えます。五十年に一度の勝縁にめぐりあわせていただいたことに感謝しつつ月に四〜五回芝増上寺に行き、忙しい毎日を送っております。明年一月には「念仏行脚（ねんぶつあんぎゃ）」というお念仏を唱えながら街中をめぐり修行する行事もあります。葛飾の浄土宗寺院では一月十八日に亀有から新宿（にいじゆく）周辺をめぐります。機会がありましたら街頭でご覧下さい。